

令和6年度の生きものの確認結果

1. 令和6年度の生きものの現地確認の概要

令和6年度に実施した区内の生きものの現地確認は表 1.1 に示す日時と場所で開催し、春夏・秋冬の2回で計49種の生きものが確認されました（表 1.2）。

表 1.1 令和6年度の生きものの現地確認の概要

季節	実施日時	天気	場所
春夏	令和6年9月26日（木） 09:00～12:00	晴	肥後細川庭園 関口芭蕉庵 江戸川公園 神田川
秋冬	令和7年2月18日（火） 09:00～12:00	晴	小石川植物園

表 1.2 令和6年度の生きものの現地確認結果


区分	春夏		秋冬		年間		計
	在来種	外来種・不明	在来種	外来種・不明	在来種	外来種・不明	
哺乳類	0種	0種	1種	0種	1種	0種	1種
鳥類	6種	0種	19種	0種	19種	0種	19種
爬虫類	1種	1種	0種	0種	0種	1種	1種
両生類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
魚類	0種	1種	0種	0種	0種	1種	1種
陸産貝類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
淡水産貝類	0種	1種	0種	0種	0種	1種	1種
昆虫類	15種	1種	0種	0種	9種	1種	10種
クモ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ムカデ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ワラジムシ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
エビ・カニ類	1種	0種	0種	0種	1種	0種	1種
ミミズ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ヒル類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
ウズムシ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
種子植物類	7種	7種	5種	2種	9種	4種	13種
シダ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
コケ類	0種	0種	0種	0種	0種	0種	0種
菌類	0種	0種	1種	0種	1種	0種	1種
計	32種	11種	27種	2種	41種	8種	49種


2. 令和6年度の生きものの現地確認状況


2.1 春夏の現地確認結果

春夏に確認された生きものの写真と概説を以下に整理しました。

(1) 鳥類

	カルガモ 神田川 2024年9月26日 『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.36
	<コメント> 多くのカモ類は冬鳥ですが、カルガモは区内でも一年中見ることができます。区内では大きな公園の池や神田川で見ることができ、観察日には神田川で休んでいる姿が観察できました。

	イソシギ 神田川 2024年9月26日 (都)VU 『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.39
	<コメント> 多くのシギ類は渡り鳥で、渡りの経路や中継地となる水辺以外ではなかなか見られません。イソシギは東京湾周辺で比較的良好に見られるシギ類で、春や初秋など渡りの時期に神田川でたまに見られます。警戒心が強いので見つけてすぐに飛ばれてしまいました。

	オナガ 肥後細川庭園 2024年9月26日 重要種・(都)NT 『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.43
	尾が長いのでオナガと言います。カラスの仲間、群れで生活しています。観察日には木の上は何羽も止まり、木の実を食べながら「ギューイ、ギューイ」と鳴いていました。



シジュウカラ

江戸川公園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.44

<コメント>

カラ類の仲間で、樹林地でよく見られる小鳥ですが、都会の環境に適応してきた鳥です。黄緑色の背中と、胸の黒いネクタイ模様がポイントです。木の上を飛び回るので目ではなかなか見つけにくいですが、「ツツピ ツツピ」という鳴き声でその存在を確認できます。



ヒヨドリ

肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.45

<コメント>

本来は樹林地にいる鳥ですが、都会の環境に適応し、今や都会で最も観察しやすい鳥の一つです。体は暗褐色で、ハトより少し小さいのが特徴です。くちばしの色が薄く、頭の産毛のような羽毛が残っていることから、写真の個体は幼鳥だと思われます。



ハクセキレイ

神田川

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.50

<コメント>

都会でも比較的よく見られる鳥の一つです。人目をあまり気にせず道路や屋根の上を小走りしている姿をよく見かけます。「チチッ チチッ」と鳴きながら、波形に飛ぶ姿も特徴的です。観察日には神田川の畔でエサを食べていました。

(2) 爬虫類

	<p>アカミミガメ 神田川 2024年9月26日 外来種 (条件付特定外来生物)</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.141、142</p>
	<p><コメント> 北米南部原産の外来種で、かつてはミドリガメとして販売・飼育されていました。池や川の土手を崩したり、水生植物を食い荒らしたりといった実害をもたらすため、販売や野外への放流等は外来生物法で禁止されています。観察日は神田川の畔の石の上で甲羅干しをしている様子が観察できました。</p>

	<p>ヒガシニホントカゲ 肥後細川庭園 2024年9月26日 (都) CR+EN</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.55</p>
	<p><コメント> 文京区内ではヒガシニホントカゲとニホンカナヘビの2種類の似た爬虫類が観察できます。体面に光沢のあるのがヒガシニホントカゲで、体面がザラザラしているのがニホンカナヘビです。写真の個体は幼体で、尻尾が鮮やかな青色をしているのが特徴です。成体になると尻尾が褐色になり、全体的に地味な感じになります。</p>

(3) 魚類



コイ
神田川
2024年9月26日
外来種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.142, 155

<コメント>

在来種と思われがちですが、現在の日本で見られるコイのほとんどは意図的に放流された外来種です。神田川では大きく育ったコイがよく見られます。

(4) エビ・カニ類



サワガニ
文京区内
2024年9月26日
重要種・(都)*

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.89

<コメント>

文京区内に所々に残されている湧水ではサワガニが生息しています。体色には赤褐色や紫色、青色など様々な変異がありますが、文京区内でみられる個体は赤褐色のものが多いです。写真の個体は幼体で、色が薄く周囲の色に同化しています。

(5) 昆虫類



キイトトンボ
肥後細川庭園
2024年9月26日
(都) VU

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

植物の茂った沼地や湿地に生息するイトトンボの仲間です。オスの腹部は鮮やかな黄色で、末端部の背面には黒斑があります。メスの腹部には、黒斑はなく、黄色と緑糸の個体があります。写真の個体は、オスだと思われます。



アオモンイトトンボ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.61

<コメント>

平地の池沼で比較的良好に見られるイトトンボの仲間です。オスの腹部の先の方に鮮やかな水色をしていることが名前の由来になっています。似た種類のアジアンイトトンボとは、腹部の空色模様の入り方の違いで区別できます。



ギンヤンマ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.61

<コメント>

頭部と胸部が黄緑色に輝いて見えるトンボです。写真の左側の個体がギンヤンマのオスで、区内で良く見られるトンボ類の中では大きい部類になります。



シオカラトンボ
神田川

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

市街地でも比較的良好に見られるトンボです。写真の個体はオスで、シオカラの由来となる水色の体をしています。メスは茶色の体をしています。



ナツアカネ
肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

アキアカネとともに赤とんぼと呼ばれるトンボの一種です。ナツアカネの方がひとまわり小さく、オスは顔も含めて全身が真っ赤になります。写真の個体はナツアカネのオスです。



ショウリョウバッタ
肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

大型のバッタで、お盆の精霊祭の頃によく見られることからその名が付いたと言われています。オンブバッタとは異なる種で、より厳つい見た目をしています。



コバネイナゴ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

イネの害虫としてよく知られているイナゴの代表種です。イネ科植物を好んで食べ、水田以外でも見られます。体長は2~4cm前後で、オスよりメスの方がひとまわり大きいのが特徴です。写真の個体はオスと思われます。



イボバッタ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

小型のバッタで、身体は灰褐色をしています。背中にイボのような突起を持つことが名前の由来です。草丈が低く日当たりのよい場所によく見かます。



アブラゼミ (抜け殻)
江戸川公園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

比較的大きめで、触角が太く目立つ特徴からアブラゼミの抜け殻であると識別できます。よく似たミンミンゼミの抜け殻は触角が小さくあまり目立ちません。



キマダラカメムシ

肥後細川庭園

2024年9月26日

外来種

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

台湾や東南アジアが原産と考えられているカメムシで、近年急速に分布を拡大しています。写真の個体は幼虫です。



アメンボ

肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

水面で暮らすカメムシの仲間、街中の公園の池でも普通に見られます。区内で見られるアメンボの仲間は他にオオアメンボやヒメアメンボなどがいますが、本種は最も普通に見られる種です。



ツマグロヒョウモン

肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.69

<コメント>

メスの前翅先端部に黒色と白色の帯模様を持つのが特徴です。写真の個体はオスで、後翅の外縁が少しだけ黒いです。成虫は花の蜜を、幼虫スマレ科植物の葉を食べます。本来は南方系のチョウですが、温暖化や幼虫食草の植栽などの影響で、近年では関東の市街地でも普通に見られるようになりました。



ヒメジャノメ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.70

<コメント>

翅に目玉模様を持つジャノメチョウの仲間です。明るい林や草地の周辺で見られます。成虫は樹液や熟れた果実などを食べます。幼虫はイネ科植物の葉を食べます。成虫はふわふわと比較的ゆるやかに飛び、草の葉などによく止まります。



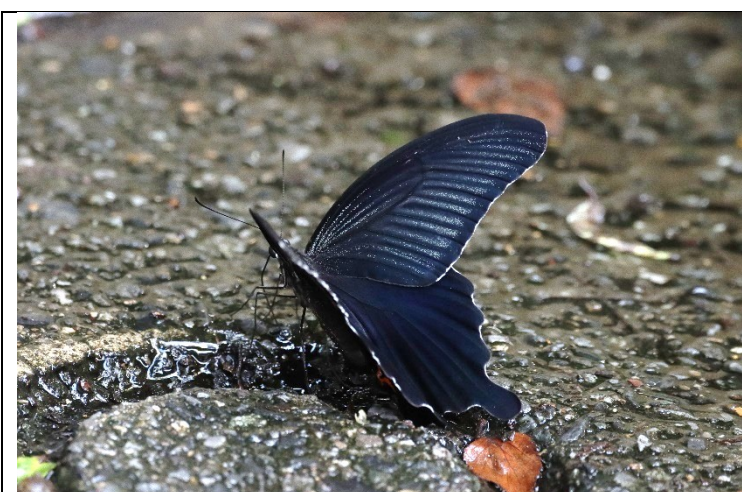
コムスジ
幽霊坂

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

黒褐色に白の三本線が走っているのが特徴です。主に林の周辺に生息し、樹液や熟れた果実、花の蜜などを食べます。幼虫はマメ科植物の葉を食べます。成虫は羽ばたきと滑空を交互に繰り返しながら飛び、翅を開いた状態で止まります。




クロアゲハ本土亜種
幽霊坂

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.71

<コメント>

全体的に黒っぽい色をしたアゲハチョウの仲間です。やや暗い場所を好んで飛行するのが特徴です。成虫は花の蜜を、幼虫はミカン科植物の葉を食べます。観察日には崖線からしみ出た水を吸水しているのを観察しました。

	アゲハ 江戸川公園 2024年9月26日
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.72
	<コメント> 全体が薄い黄色と黒で、よく似たキアゲハよりも少しだけ黒っぽい特徴があります。春に見られる成虫よりも、夏に見られる成虫のほうが大きいという季節型の違いがあります。成虫は花の蜜を、幼虫はミカン科植物の葉を食べます。観察日には崖線からしみ出た水を吸水しているのを観察しました。

	モモスズメ 江戸公園 2024年9月26日
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 なし
	<コメント> 夜行性のスズメガの仲間で、後翅が桃色になるのが名前の由来です。幼虫は主にバラ科食物の葉を食べます。果樹園や雑木林周辺で見られます。写真の個体は終齢幼虫で、もうすぐ蛹になります。

	ウバタマムシ 肥後細川庭園 2024年9月26日 (都) VU
	『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.78
	<コメント> 線状にゴツゴツした背中をした体長24~40mmの大型のタマムシの仲間です。マツ林に生息し、成虫はマツの葉を、幼虫はマツの材を食べます。

(6) 淡水産貝類



カワニナ
肥後細川庭園
2024年9月26日
在来種または国内由来外来種
『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>
本来は流れの緩やかな小川によく見られる淡水巻貝ですが、文京区内ではホタルの幼虫の餌も兼ねて湧水などに放流されています。落ち葉や付着藻類などの有機物を食べています。

(7) 維管束植物類



サンゴジュ
椿山荘
2024年9月26日
『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>
常緑性の広葉樹で樹高7~8mの小高木です。6~7月に小さな白い花が円錐状に集まって咲き、そのサンゴのような深紅色の果実がつきます



カヤ
関口芭蕉庵
2024年9月26日
『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>
固くて先が鋭く尖った葉を持つ常緑針葉樹で、材は最高級の碁盤になります。オリーブに似た緑色の実をつけ、昔は食料油や薬の原料に利用されていました。



ヒガンバナ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.94

<コメント>

秋の彼岸の頃に花を咲かせることから彼岸花と呼ばれます。2024年の夏は暑かったためか、開花の時期が例年よりも遅れていました。



ヤブミョウガ
肥後細川庭園
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.95

<コメント>

ミョウガと名がつきますが、葉の雰囲気はミョウガと似ているだけで、ミョウガとは全く別の種類です。8~9月頃、茎の上部に白い花の穂をつけます。観察時は、白い花は残り僅かで、青紫色の実が見られました。



クヌギ
幽霊坂
2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

雑木林の主要構成樹種の一つです。古来より薪の材料として人に利用されてきた樹木であり、樹液はカブトムシやクワガタなどの甲虫類やチョウ類などに人気の餌となっています。クヌギの実はドンダリの一つで、丸く大きな形をしているのが特徴です。



カラスザンショウ

幽霊坂

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載なし

<コメント>

ミカン科の落葉高木で、他のサンショウに比べ葉や実が大きいのが特徴です。林縁や伐採跡地などの比較的明るい所に生えます。アゲハチョウ類の食草として重要な存在でもあります。写真は幼木で、鋭い刺があります。



ミズヒキ

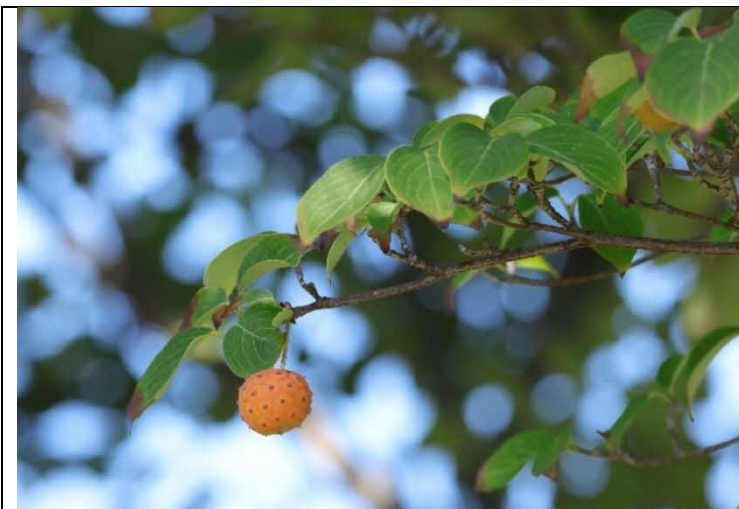
肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載 P.102

<コメント>

線のように細い長い花茎を伸ばして小さな赤い花を穂状に咲かせます。花は夏の終わりから晩秋にかけて長く咲きます。観察時にも小さな花を観察できました。



ヤマボウシ

肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載なし

<コメント>

6~7月の梅雨頃に白色の素朴な花を咲かせます。主に観賞用に植えられていますが、果実は果実酒などに利用することもできます。果実は鳥の餌にもなります。9月の観察時は、果実をたくさん実らせていました。



カキノキ

肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

果物として馴染みのあるカキですが、観察したカキの品種は不明です。初夏に白い雌花と雄花とが咲き、秋に黄赤色の実を結びます。果実は鳥類や昆虫類の餌となります。



アサガオ

肥後細川庭園

2024年9月26日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

<コメント>

園芸によく植えられているツル性の一年草です。ヒートアイランド対策の一つである緑のカーテンの材料にもなります。肥後細川庭園ではカーテン状に仕立てられていました。また、アサガオの花の色はリトマス紙のように色が変わる特性があり、酸性では赤色、中性では紫色、アルカリ性では青色に変化します。



コムラサキ

幽霊坂

2024年9月26日

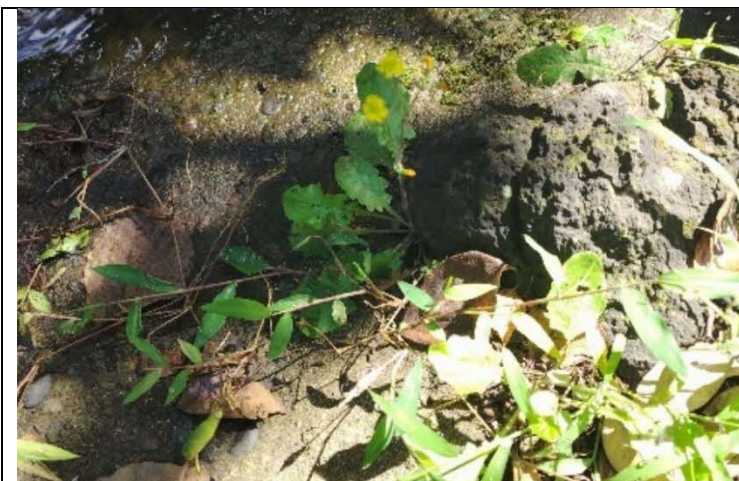
『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.106

<コメント>

名前の由来は、同科同属のムラサキシキブに似ていて小さいことからコムラサキになったとされています。実は直径約3mmの球形で、紫色に熟します。写真は、熟す前の薄紫色の実です。



クサギ
幽霊坂
2024年9月26日
『文の京生きもの図鑑』の掲載なし
<コメント>
シソ科の落葉低木で、葉や枝に独特の匂いがあります。日当たりのよい原野や林縁、崖地、河原などで群生します。赤色の小型の果実をつけ、鳥類に好まれるため、鳥類にあちこちに運ばれ、色々な所に生えています。



オニタビラコ
肥後細川庭園
2024年9月26日
『文の京生きもの図鑑』の掲載なし
<コメント>
キク科の多年草で、春に小型の葉を少数つけた花茎を伸ばし、時には1m近くまで成長します。花茎の先は分岐して、小型の黄色い頭花を多数つけます。



ツワブキ
肥後細川庭園
2024年9月26日
『文の京生きもの図鑑』の掲載なし
<コメント>
キク科の常緑多年草で、葉は革質でつやがあり、フキのような円状をしています。花は株の中心から出て、先端に10~30輪ほどのキクに似た、花径3cm前後の黄色い花を咲かせます。昔から薬用や食用として利用されてきたほか、観賞用にも植栽されてきました。

2.2 秋冬の現地確認結果


秋冬に確認された生きものの写真と概説を以下に整理しました。

(1) 哺乳類

	<p>アズマモグラの巣 小石川植物園 2025年2月18日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載なし</p> <p>関東平野に生息するモグラはアズマモグラとされています。体長は12~16cm、体重は50~130gです。肉食で主に昆虫類やミミズ類を食べ、1日に体重と同じくらいの量を食べます。縄張り意識が高く、トンネルは単独で利用します。縄張りの範囲は50m²くらいが目安と言われており、トンネルの出口には土が積み上げられたモグラ塚が形成されています。</p>

(2) 鳥類

	<p>カルガモ 小石川植物園 2025年2月18日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載P.36、144</p> <p>カモ類の多くは冬鳥ですが、カルガモは区内で1年中見られる種類です。観察日には植物園内の池で泳いでいる姿を近くで観察できました。</p>

	<p>ゴイサギ (幼鳥) 小石川植物園 2025年2月18日 重要種：(都) VU</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載P.6、137、144</p> <p><コメント></p> <p>ゴイサギは夜行性のサギで、昼間は樹木や崖・擁壁の上など安全な所で休んでいます。成鳥は頭から背が濃い青黒色で、翼が灰色ですが、写真の個体は幼鳥のため全体的に褐色で、淡色の白斑があります。幼鳥はその見た目から通称“ホシゴイ”とも呼ばれています。区内では通年見られます。</p>



コサギ
 小石川植物園
 2025年2月18日
 重要種：(都) VU
 『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.39、144
 <コメント>
 シラサギと呼ばれるサギの一種で、日本で見られるシラサギの中では一番小型です。嘴と脚が黒く、趾が黄色なのが特徴です。区内では通年見られ、観察日には池の暗がりで見られる姿が観察できました。



チュウサギ
 小石川植物園
 2025年2月18日
 重要種：(国) NT、(都) NT
 『文の京生きもの図鑑』の掲載なし
 <コメント>
 シラサギと呼ばれるサギの一種で、コサギよりも大きくダイサギよりも小さい中型のサギです。繁殖期(夏頃)と非繁殖期(冬頃)で見た目が異なり、嘴の色は非繁殖期は黄色ですが、繁殖期は黒くなります。関東地方では主に夏鳥ですが、区内では春・秋の渡りの時期などに稀に見られます。昼行性ですが、観察日には地上で片足立ちで休息していました。旅で疲れていたのかもしれませんが。



トビ
 小石川植物園
 2025年2月18日
 重要種：(都) NT
 『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.13、21
 日本のタカでは最も普通に見られる種で、「ピーヒョロロロ」と鳴くのが特徴です。かつて区部ではほとんど生息していませんでしたが、競合相手のカラスが都心で少なくなったことで、区部でも見られる機会が増えたと言われています。



カワセミ

小石川植物園

2025年2月18日

重要種：(都) VU

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.25、41、144

オスとメスはパッと見では同じに見えますが、^{くちばし}嘴の下部の色がオスは黒色で、メスは橙色という違いがあります。写真の個体はオスです。小さく素早く飛ぶため見つけにくいですが、「ピー」「キッキッ」という甲高い鳴き声でその存在に気付きます。観察時には、池の上の小枝に止まりながら、小魚を捕食している姿を見ることができました。



シジュウカラ

小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.8、44、144、162

カラ類の仲間で、樹林地でよく見られる小鳥ですが、都会の環境に適応してきた鳥です。黄緑色の背中と、胸の黒いネクタイ模様がポイントです。冬は群れを形成することが多く、観察日も群れているのが観察されました。



ヒヨドリ

小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.45、144、162

ハトより少し小さい樹林性の鳥です。群れていることが多く、観察時には樹木の果実に群れが集まっていました。近年は柑橘類のほかブロッコリーやキャベツなどの葉物野菜への食害が問題視されています。



メジロ
 小石川植物園
 2025年2月18日
 『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.8、47、144、153、162
 <コメント>
 体長が12cmでスズメより少し小さな鳥です。メジロは名前のおり、目の周りが白く縁どられています。主に樹林地に生息しますが、エサの少ない冬は、ツバキやウメなどの花の蜜を吸いに街中でもよく見られるようになります。体色がウグイス色に似ているため、ウグイスと間違えている人がいるかもしれません。



ムクドリ (幼鳥)
 小石川植物園
 2025年2月18日
 『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.47、144
 ハトとスズメの間ぐらいの大きさの鳥で、都会で最も観察しやすい鳥の一つです。群れで行動し、しばしば大群を形成します。黒っぽい体に白い顔と、橙色の^{くちばし}嘴と脚が特徴です。写真の個体は色が淡いため、幼鳥と思われます。



ハクセキレイ
 小石川植物園
 2025年2月18日
 『文の京生きもの図鑑』の掲載
 P.8、9、50、145
 都会でも比較的によく見られる鳥の一つです。縄張り意識が強く、たいていは単独か夫婦か親子で行動しています。観察日は親子で池の畔でエサ探ししている姿が見られました。写真の個体は頭の色が濃いのでオスと思われます。

(3) 昆虫類



オオカマキリ (卵塊)

小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.63、146

日本産カマキリの中で最大の種で、草地や林縁に生息しています。オオカマキリはメスの方がオスより大きくなります。カマキリの卵塊は種によって異なる特徴があり、オオカマキリの卵塊は「釣鐘型」の形をしており、大きくシンプルな見た目をしています。

(4) 維管束植物類



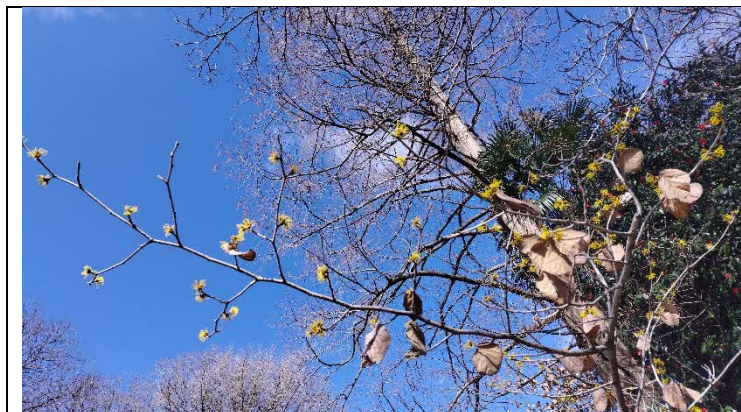
バショウ

小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

バナナと同じ種類の植物で、全長は2~3m、葉の大きさは1m以上にもなる多年生草本です。中国原産とされていますが、英名では“ジャパニーズバナナ”と呼ばれています。花は夏から秋にかけて咲きますが、結実率が悪いので、小さいバナナのような果実は滅多に見られません。葉や根茎は漢方薬の原料として利用されてきました。



シナマンサク

小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
なし

マンサクの中でも最も大きな花を咲かせます。マンサクは「まず咲く」を語源としますが、中国原産のシナマンサクは、日本原産のマンサクよりもさらに早く咲くのが特徴です。



カンヒザクラ

(品種：カンザクラ)

2025年2月18日



『文の京生きもの図鑑』の掲載なし

カンヒザクラとヤマザクラの交配品種とされ、まだ寒い1~2月頃に開花します。花は淡いピンク色をしており、サクラらしい中輪一重の形状の花を咲かせます。花の少ない時期に咲くため、メジロやヒヨドリなどの野鳥にとって貴重な餌場となります。観察日は満開を少し過ぎた頃でした。



ウメ林
小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載
P.21、151、152、159

小石川植物園の南西側にはウメ林が広がっています。多様なウメの品種が植えられており、一重咲き・八重咲きなどの形状や、色も白・紅・ピンクなど様々な品種があります。

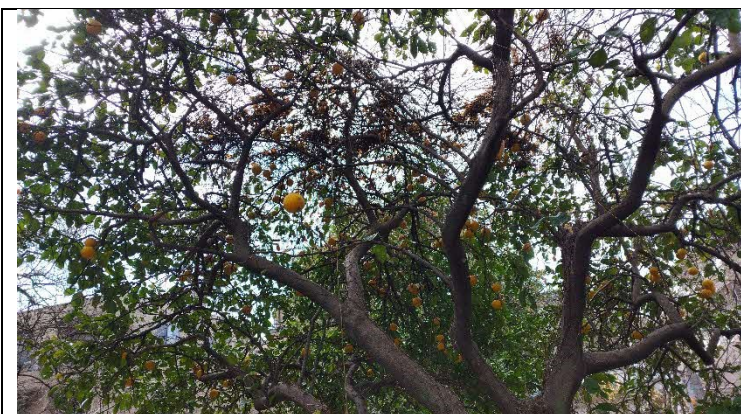


ウメ（品種：八重松島）
小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載なし

八重咲きの野梅系の品種で、花は1月中旬から咲き始め、1月下旬~2月下旬頃が見頃になります。蕾はやや濃い色をしています。開花すると明るい紅色になります。



ナツミカン
小石川植物園

2025年2月18日

『文の京生きもの図鑑』の掲載なし

ナツミカンは5月頃に開花し、6月頃に結実し、晩秋から冬に大きく膨らみ黄オレンジ色になっています。果実が冬を越して翌年の夏が食べ頃になることが名前の由来です。

	<p>アセビ 小石川植物園 2025年2月18日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 なし</p>
	<p>アセビの花は鐘のような形をしていて、スズランの花に似ています。開花時期は2~4月と、比較的長い間花を咲かせます。有毒で殺虫剤や寄生虫駆除剤などに利用されます。漢字で馬酔木と書き、馬が葉を食べて酔酩状態になったことに由来すると言われていいます。</p>

	<p>スイセン 小石川植物園 2025年2月18日</p>
	<p>『文の京生きもの図鑑』の掲載 なし</p>
	<p>別名“雪中花”と呼ばれる、冬の代表的な花です。地中海原産で様々な品種があり、開花時期は11月中旬に咲くものから4月に開花するものがあります。日本でよく見られるのはニホンスイセンと呼ばれ、古い時代にシルクロードを通して中国経由で渡来して野生化したと言われています。</p>

3. 重要種のカテゴリー

＜重要種のカテゴリー＞

レッドリスト (東京都区部) ※1	レッドリスト (環境省) ※2	基本概念
絶滅 (EX)	絶滅 (EX)	既に絶滅したと考えられる種
野生絶滅 (EW)	野生絶滅 (EW)	飼育・栽培下あるいは自然分布域の明らかに外側で野生化した状態でのみ 存続している種
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅の危機に瀕している種
絶滅危惧ⅠA類 (CR)	絶滅危惧ⅠA類 (CR)	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの
絶滅危惧ⅠB類 (EN)	絶滅危惧ⅠB類 (EN)	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅の危険が増大している種
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」 に移行する可能性のある種
情報不足 (DD)	情報不足 (DD)	評価するだけの情報が不足している種
—	絶滅のおそれのある地 域個体群 (LP)	地域的に孤立している個体群で、絶滅のおそれが高いもの
留意種 (*)	—	現時点では準絶滅危惧のレベルではないが、相対的に数が少ない種であり、 容易に個体数が減少することがあり得るため、留意が必要と考えられるも の

※1：「東京都レッドリスト（本土部）2020年版」（東京都、令和3年3月）の区部に該当する掲載種

※2：「環境省レッドリスト2020」（環境省、令和2年3月）（植物・菌類以外）、
「環境省レッドリスト2025」（環境省、令和7年3月）（植物・菌類のみ）

＜重要種のカテゴリー＞

もともとその地域にいなかったのに、人間の活動によって他の地域から入ってきた生物種を
“外来種”と呼びます。

本報告では、下記に該当する生物種を“外来種”として選定しています。

- ①「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（平成16年法律第78号）に
基づき指定された特定外来生物、未判定外来生物
- ②「我が国の生態系に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」に掲
載の生物種
- ③国立研究開発法人国立環境研究所「侵入生物データベース」に掲載の生物種